

発表題目：国王が行く  
—ブータン国王による行幸とその変容—

所属： 京都大学アジア・アフリカ地域研究研究科博士一貫課程

氏名： 石内 良季

1200字程度で発表内容を記載してください。

本発表はブータン国王による行幸の内容とその変容に着目し、行幸がブータン社会にどのような影響を与えてきたのかを明らかにする。

ブータン国王は時に「菩薩王」や「人民の王」と呼ばれ、今日まで人々に尊敬と敬愛の念を抱かれ続けてきた。こうした国王像形成の背景には、「歩く王 (pedestrian king)」[Kinga 2020] という呼称や「国王の足跡のない村はない」という言い回しからも分かるように、国王自らが国内各地を満遍なく廻り、昼食を国王自らが給仕する誠実な行為や貧困層への衣服や土地の下賜、行幸先で民衆に直接話しかけるといった人々に寄り添う姿勢がある。

1972年に第3代国王ジグメ・ドルジ・ワンチュックが急逝し、弱冠16歳で即位した第4代国王ジグメ・シンゲ・ワンチュックは、即位後すぐに行幸を始めるようになる。20世紀後半の第4代国王による行幸は、南部の治安悪化といった社会状況の変化のなかで、政府と人々との連帯と協力によって成功されるべき開発の重要性を伝える場として、また、国王と人々との一体感が図られ、国王を国の象徴として人々が認識することができる場として機能していった。こうした国王による行幸は2000年代に入り、絶対君主制から民主立憲君主制への体制移行が進められてきた時期も継続された。2004年に憲法草案の大部分が執筆されてから2008年の新憲法公布に至るまで、第4代国王と当時王太子であった現国王ジグメ・ケサル・ナムゲル・ワンチュックは全国を廻り、国民の意見を聞くとともに、民主化の必要性和新しい体制下における国民一人一人の責任について主張してきた。2020年にはじまった新型コロナウイルスの世界的拡大のなかでも、国王は自らの身を感染の危険にさらしながら感染が拡大する南部国境地帯を行幸し、感染対策とコロナ最前線で働く人々への励ましに尽力した。その姿はたちまちSNS等で拡散され、今日、国王は新型コロナウイルスとの戦いの新たな象徴になっている。

本発表では、こうしたブータン国王（および王太子）による各時代の行幸の内容に着目し、それらの間に見られる連続性や差異、それぞれの特徴を提示することで、国王が行幸する意義だけでなく、国王と同時に移動し各地に広がっていく開発や民主主義といった概念の移動にも着目する。なお本発表で主に用いるデータは、1967年から2008年までの間に発行されたブータンの全国紙「Kuensel」（約42年分）を基に報告者が2018年から断続的に行ってきた調査とコロナ禍における記事（2020年1月から現在まで）の分析に基づいている。

【参考文献】

Kinga, S. 2020. *Democratic Transition in Bhutan Political Contests as Moral Battles*. London and New York: Routledge.